

小児心筋炎・心膜炎の個人調査票 アンケート結果中間報告

日本大学医学部小児科 大 国 真 彦
豊 田 博 史

方 法

本研究班において作成し、アンケートを研究協力者の各施設に配布した。

対 象

7施設より、計45例の心筋炎・心膜炎症例のアンケートが寄せられた。なお、中間集計後も数施設よりアンケートが寄せられている。今回は、45例の性別、年齢、前駆症状出現から心症状出現までの期間、心症状出現から診断までの期間、死亡率、ウイルス検査、症状、心音に関して集計した。その他の事項に関しては、今後集計し改めて報告する。

結 果

1. 性 差

男児：女児は、約4：5で性差は認められなかった。

2. 年 令

心症状出現時の年齢は、表3に示すとおりであり、0才から4才までに約半数が認められた。

3. 前駆症状から心症状出現までの期間

特に一定の傾向は認められないが、10日以内に出現したものは20例(44%)、11日以後4例(8%)、不明21例(46%)であった。

また、前駆症状を認めるものは、26例(57%)で、残り19例は前駆症状不明か突然心症状をもって発症した。

3. ウイルス検査

検査施行例は、45例中19例(但し、1例はブ菌性心膜炎)で、その内有意にウイルス抗体価の上昇あるいは下降の認められたものは、5例(26%)であった。

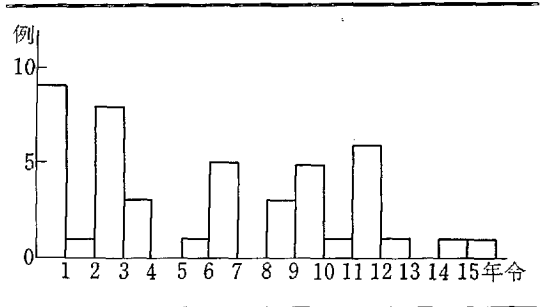
4. 死亡率

45例中14例が死亡している(31%)。今回の調査施設が、大学病院、国立病院を主体としているため、死亡率が高いと考えられる。

5. 症 状

前駆症状は、発熱20例(44%)が最も多く、咳嗽9例

表1 年令別分布



(20%)、疲労6例(13%)、の順に認められた。前駆症状を含めた全体の症状では、発熱29例(64%)、疲労25例(55%)、呼吸困難26例(57%)、顔面蒼白24例(53%)、尿量低下22例(48%)、以下、不機嫌、胸部圧迫感、心悸亢進、胸痛、チアノーゼ、浮腫等が多い傾向にあった。下痢、発疹、失神等は少なく、血痰は肺硬塞の1例のみ認められた。

6. 心 音

初診時が最悪時と同時期の場合は、最悪として集計した。初診時、I音減弱6例、II音分裂8例、III音3例、Distant sound 6例、Gallop 8例、Friction rub 1例、収縮期雑音11例、拡張期雑音3例に認められた。最悪時では、I音減弱10例、II音分裂10例、III音11例、IV音1例、Distant sound 15例、Gallop 14例、Friction rub 3例、収縮期雑音16例、拡張期雑音3例に認められた。つまり、状態悪化とともに、Gallop Distant Soundが出現し、収縮期雑音が聞かれるようになった。しかし、回復期には、これら所見は大部分消失する。経過に関しては、さらに検討を要すると考える。

今後、さらに血液所見、心電図、胸部レントゲン所見、UCG所見、VCG所見、心カテ所見、心筋組織所見等を検討し、改めて報告する予定である。

↓ **検索用テキスト** OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります ↓

方法

本研究班において作成し,アンケートを研究協力者の各施設に配布した。